

令和3年度第1回福島県総合教育会議 議事録（概要）

1 日 時	令和3年7月26日（月）10時45分～12時5分
2 場 所	杉妻会館 3階「百合」
3 出席者	知 事 内堀 雅雄 教育長 鈴木 淳一 教育委員 浅川 なおみ 大村 雅恵 吉津 健三 正木 好男 成澤 勝蔵 <div style="text-align: right; padding-right: 20px;"><五十音順に掲載></div>
4 議事内容及び経過	<div style="margin-bottom: 10px;">(1) 開会 事務局（政策調査課長）</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"><震災の記憶と教訓の継承について></div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <p>【知事】</p> <p>議題の1、震災の記憶と教訓の継承について。</p> <p>東日本大震災、原発事故から10年余りが経過する中で、震災の記憶が薄れ、年々風化が進むことが懸念される。</p> <p>また、震災の記憶を持たない子どもたちが、当然ながら増えてくる。</p> <p>そのような中で、震災の記憶と教訓を次の世代に伝えていくことは、これからの福島にとって、また日本全体にとっても極めて重要である。</p> <p>はじめに、教育庁における取組について説明を行い、皆さんと意見交換していきたいと思う。</p> <p>それでは、義務教育課長から説明をお願いする。</p> <p>ー 義務教育課長、高校教育課長から資料1に基づき説明後、以下のとおり意見交換 ー</p> </div> <div> <p>【教育委員】</p> <p>震災があったすぐ後に、相馬市が世界に向けて助けを求めたことがきっかけとなり、エル・システマ（音楽教育プログラム）というものができて、ウィーンフィル等が相馬市に指導に来ている。それは震災がもとになっており、海外に向けて情報発信した時、私たち個人ができること以上のすごいことができるとしており、そのようなものまで動かしてしまうのだなと実感したところである。</p> <p>それから、想像を絶する震災、原発事故ということだが、よほど考えないと想像を絶するということにはならないと思うので、子どもたちが、想像を絶するとはどういうことなのかを考えるような機会があれば、皆で話し合ってみてはどうか。</p> <p>語り部については、真実を知った上で、誇大表現や妄想、またその逆の表現にも</p> </div>

ならないように関わっていただきたい。

震災は、今の10歳の子たちが生まれた年ということになるが、どういう訳か、学校によってなのかもしれないが、クラスの3分の1くらいの子どもが、少し情緒不安定であるということを知っている。震災のときに親が不安定で、育てるときにも不安定だったのかなということを考えるのだが、これはどうしたらいいものかと、少し心配になっている。

【教育委員】

今、4年生の子どもが、震災時には0歳ということになっており、今後、震災を実体験として知らない世代にどんどん移り変わっていく。そのような中で、行人小学校が行っている風評被害やいじめについて考えるということは、非常に良いことだと思った。子どもの教育というのは、どこまで何を伝えるのが正しいやり方かわからないところはあるが、やはり事実として何があったのか、例えば、あんなにおいしい福島県産の食材が、他国や他県で受け入れられなかった話や、放射線の検査をして安全だという客観的な事実がありながらも、イメージが先行して風評被害やいじめなどが起きていたことは、これは間違いない事実だと思っている。震災や原発事故で福島県がどういう位置付けにされてしまったのか、データや客観的な数値を出しても、容易にそれが覆らない状況にまで追いやられてしまった。もっとも、我々も含めて、人の弱さというものがあるので、データがあるから安心と言われても、中々受け入れられないということも承知はしている。行人小学校で取り組まれているのは、何が事実として起きていたのか、風評被害やいじめなどを防ぐためには、どういった行動をとらなくてはいけないのかということにつなげる取組だと思う。近年、SNSなどでフェイクニュースという言葉が定着しているが、何が事実として起きているのか、その事実をきちんと伝え、その事実に基づいて考えることができる教育というのが必要なのかなと、行人小学校のパートを見て考えた次第である。

そういった事実に基づいて考えていける教育ということで、風評被害やいじめが無くなるというだけではなく、様々な物事を捉えるときや、新しい物事に出会ったとき、何が事実なのか、その事実をどう評価し、どう考えていくことが良い方向なのか、ということにつながっていくのかなと思っている。

そういった風評被害やいじめは、今後、多発する地震や南海トラフといった大規模災害、ウイルスの問題などが発生した時に、少なくとも福島県の子どもたちは、事実に基づかない、雰囲気でおそれ、雰囲気弱い人の立場をないがしろにするようなことはしない、それだけは震災や原発事故被害を経験した福島県として絶対にしないということを育てていけたらと思う、行人小学校の取組について、すばらしいことと思って資料を拝見していた。

あと、些細なことなのだが、ネーミングが「震災の記憶と教訓の継承」ということだが、「教訓」は少し固いというか、何か反省が絡んでいるような、「してはいけない」ということを彷彿とさせる言葉ではないかと、個人的には思っている。この資料を見て、教訓よりも何かもっと良い言葉がないかと思った。体験や教育を未来の発展につなげるということが内容だと思っているので、何か「教訓」というと、悪いこととしてはいけない、べからず集のようなイメージを思い浮かべてしまうよう

な感じがした。

【教育委員】

今の日本で、電力供給における原発の在り方を考えるという課題に接した時に、まずその入口に福島県の原子力災害があるということで、日本中の生徒さん、高校の生徒さんが、いわき市に来られ、そこに宿泊しながら、伝承館などの施設で学ばれているという話を聞いている。

その時に、偶然見せていただいたのが、「福島あの悲劇から今」という、観光交流課が作っている資料である。高校生は、学校で事前にこの資料を全部読み尽くして、学んで、それから福島県に来られる。そして、伝承館や、いわき市で生活している被害に遭われた方の話を聴いており、今の日本を考える課題として、福島県の災害があると聞き、資料を見せていただいたところ、中々網羅されていて、私たちが見ても非常に勉強になる。この10年間で蓄積されているのだなということ、すごく感じた。

今、説明を聞いて、広い県内なので地域差はあり、それぞれ取組方法は違っているが、全ての小学校、中学校で、この記憶と教訓の継承について努力されていることに感激した。

それから一つ、小学生が6年間で学ぶ要素というのは、各学校で共通的に用意されているのか、中学校でも共通の要素は用意されているのかということ考えた時、この義務教育の中でのリーフレットの作成という言葉が、私にはすごく印象に残った。副教本になるような共通のリーフレットを配布して、基本的な要素はそこで学べる。その上で、各学校の努力がそこに加わっていけば、小学校、中学校、高校になって、語り部活動につながる基礎ができるのかなということ、すごく感じている。福島の系統立てた教育の過程の中で、小学校、中学校での基本的な要素を共通に用意できるというところに、非常に期待しており、是非推進してほしい。放射線の影響や、その結果として地域が持っている課題、防災教育、それから避難に伴ういじめ、ふるさとの喪失感、様々な意識力の低下など、そういう問題が全て共通の課題として用意されて、その上で、更に高校になって、自分たちが考えた未来につながるような語り部活動ができれば、これから福島の未来に期待できると考えている。

【教育委員】

例えば、私自身が東京大震災を語れるか、そういう過去の震災の記録というのは、どこまで自分でたどれるのだろうか、あるいは自分で語り継ぐことができるのだろうかと思った。福島県の場合も、津波と原子力災害という複合災害が起きたが、津波は浜通りであり、中通り、会津は違う。だから、県内においても、その事実というか、事実認証には、やはり若干差異がある。事実に基づいた教育は当然していくべきであって、義務教育課や高校教育課の説明はもともとであり、そのように進めていくべきだと思う。

ただ、東日本大震災から10年が経った今、時が経過すれば、必然的にそういった震災を経験していない児童生徒が全てとなる。そういった環境下で、風化させずに継承させていくという非常に難しい部分がある。その時には、事務局の説明にあ

ったように組織的な仕組みの構築が必要であり、そういった環境下のもとで、震災の関連学習など、継続的な取組というのは当然のことである。

我々は自然の恵みを享受しながら生きているが、裏腹に、背中合わせで自然災害のおそろしさも、現実には体験している。最近でも、県内あるいは全国各地で、風水害による土砂対策など、様々な問題が提起され、我々はそういった事実から多くの教訓を得て、その都度、対策をとってきている。

私は、結論的には、重要なのは防災あるいは減災教育のカリキュラムであると思っている。そういった教育の流れの中で、事実として、東日本大震災、あるいは原子力災害があったということは、ある時代は継承していかなければならないと思うが、未来永劫、同じことを話すことができるかというのは、10年後20年後30年後では違うと思う。基本ベースは防災と減災教育のカリキュラム、こういった流れの中で、関連する事業を積極的に導入していくべきであると思っている。

【教育委員】

今、行われているオリンピック、また、これから行われるパラリンピックでも、本来であれば福島県のことを、もっともっと世界の人に知ってもらえれば本当に良かったのだが、今テレビを見ていても、中々そういう話題が少ないと感じている。

この事業には「大きな教育効果」があると記載されており、非常に期待している。他県の高校生や海外の高校生等との交流もあり、このようなことは是非進めていただきたいと感じている。

震災を知ることや体験したことは、同じような震災が起きたとしても、それに対応する能力が身につくのではないかとと思っている。また、自分ができること、共助ということもあるが、そういうところで知識を得る、又は技能を得ることができるのではないかと考えている。

そういうことを行うことによって、想定外のことが起きたとしても、対応する能力が身についていくのではないかと感じており、この応用力というのは、震災だけではなく、社会に出てからも様々なところで活用できるのではないかと期待している。

震災の記憶と教訓の継承に関する事業について、もっと県内の小中高校に広がってほしいと感じる。

【教育長】

毎年行っている震災の復興祈念式典では、知事からメッセージを出していただいているが、10年目に当たり、今年の知事メッセージの最後の方に「震災を知らない新たな世代に、災害の事実と復興の軌跡を伝えていきましょう。過去を伝えるのみではなく、福島の今とこれからの語っていきませんか」という言葉があった。

今回、6月補正予算で、先ほど説明があったような高校生を主とする語り部活動を中心にした教育活動を事業化した。正に、この知事メッセージについて、高校生を一番の主人公にして実現していこう、復興・創生期間の第2期に入り、今その入口に立っている福島県として、まず教育委員会が一つ一つ実現するとしたら最初の一步はこれかなということで、今回、事業化をさせていただいた。

やはり10年が経って、福島県の復興が進んだ面もかなりある。教育面において

も、ふたば未来学園を始め、成果は上がっているが、まだまだ道半ばであり、これからも、当然ながら廃炉や中間貯蔵、処理水の問題、そして、つい最近では、オリンピックの際の韓国の考えもあり、一部の高校生は非常に憤っているという話を聞いて心強く思っているが、今後も、そのようなことがずっと続いていかざるを得ないので、やはり事実はきちんと教えていく必要があります、そうでないと分からなくなってしまう。先ほど、教訓についても色々と話があったが、やはり教訓の部分というか、反省すべきことは当然反省し、また、様々な軌跡の中では、世界中から支援していただいた感謝も伝えていきたいと思うが、ただ、どうしても放射線にだけ目が行きがちであり、放射線はやはり一番大きいのだと思う。

先ほど義務教育課長の説明にもあったとおり、これまでも国から様々な支援を頂いて指導資料を作るなど、かなり力を入れて全国に展開していただいているが、放射線だけではない。先ほど委員からも、地域、あるいは時期によっても違うという意見があった。

一つの例として、長沼高校の近くに藤沼湖というところがあり、震災当時、地震の揺れは、むしろあちらのほうが大きかったところだが、そこが決壊し、人も亡くなっているが、これが風化してしまうことを危機に感じて、今、高校生が一生懸命、本当に独自の取組として、語り部を自分で行おうとしており、非常にすばらしい活動だと思う。

そういうところを今後、少しでも組織的にバックアップして、先ほども話があったが、高校生が小学校などに出かけて行って、お兄さん、お姉さんから、高校生自身も10年前の先輩から、当時の話を教えてもらったりして、小学生に伝えて、繰り返ししていくのが大事ななと思っている。語り部というと、話を聞かせるのが普通だが、やり方によっては、紙芝居や寸劇のようなもの、あるいは映像で紹介するということもあると思う。これらの活動を通じ、高校生に、過去を踏まえ将来のことまで考えてもらうことが、非常に福島らしさにつながっていくのではないかということで、力を入れていきたいと思う。

【知事】

皆さんから、それぞれ御意見を頂いた。非常に大事な取組だと思う。

私自身、ナラティブ・プレゼンテーションという、高校生たちの実際のプレゼンを生で体験しているが、彼らは、まだ実際に記憶がある。そのため、自分自身の当時の思い、あるいは御両親の対応等について、本当に自分の言葉で、かつ、プレゼンテーションを半年かけてすごく勉強しているので、とても上手である。ああいったことが、自分の思いを自分の言葉で他者に伝えるすばらしい取組であり、それも一つの延長線になってくると思う。

ただ一方で、当然月日が経つと、全く2011年当時のことが分からないお子さんたちがどんどん増えてくる。これは当たり前のことで、そこで実は大事なのは、震災の議論も大事だが、人ごと、他人ごとを自分ごとにする能力があるかどうかという、人間の本質的な力をどう教育するかである。今は、自分ファーストの時代である。そうではなくて、色々な他人の苦しみであったり、喜びであったり、辛さであったりを、我がこととして理解できる人は、色々な活動をするに当たって、すごく強い。そして、様々な意味で社会に貢献される方だと思う。

なので、今回こういった取組をする中で、福島のやさしい子たちが、自分のことではないのだけれど、人ごとなのだけれど、それをある程度、自分ごとだと捉えて、そこで考えて何かを行動する、その動きはすごく大事だと思う。

今日は、胸にシトラスリボンを付けているが、これは福島市の北信中学校の生徒が先週、私にプレゼントしてくれたものである。これは、コロナウイルス感染症の関係で、医療従事者の方々などが、色々な意味で差別され、御苦労されている、それに対して、差別はやめよう、お互い思いやりを大事しようというメッセージを、愛媛から始まった運動だが、先生から言われた訳ではなくて、生徒自身が自分で考えて始めて、3年生の一部の取組が、結局2年生、1年生を巻き込んで、学校全体の取組になったというものである。

そのため、おそらく北信中の生徒にとって、医療従事者の苦しみなどは、直接的な自分ごとではなくて人ごとだと思うのだが、人ごとを自分ごとに変化した瞬間、何かできることはないのかとあって、心が動けば身体が動くということで動き始めた結果が、このシトラスリボンだと思う。

したがって、やはりこういった教育が、震災や原発事故などで本当に苦しみを抱えている福島ならではの教育の根源、人ごとを人ごとだと突き放すのではなく、自分でも一度考えて受け止めてみる、その優しさを作れたら、とても素敵だと思うので、教育委員会は是非、頑張ってもらいたい。

<次期教育大綱について>

【知事】

続いて議題2に移る。次期教育大綱について。

それでは、大綱の内容について、事務局から説明をお願いする。

- － 政策調査課長が資料2-1、復興・総合計画課長が資料2-2により説明後、以下のとおり意見交換 －

【教育委員】

今月の半ばだが、復興現場の視察ということで、光南高校の視察に行かせていただいた。ICTの先進モデル校で、子どもたちが非常に楽しく学校で学んでおり、学習、授業を受けているときも、非常に楽しそうだなと感じた。

ICTを活用することによる先進的な学び、又はパソコンを使っただけの学習は、本当に興味が多いようなことであるし、これから社会に出ても役に立つ授業であると感じた。

今後、ICT化がどんどん進められていくと思うが、その中で、子どもたちの学びというものが、今までの教わるだけではなく、自分から学んでいこうという感じがして、教育という面においても非常に有効と感じた。

あとは、一人親の問題がある。今、一人親というものが問題になっており、その支援は行政が行っているが、ICTを活用したテレワークなどが推進されている。障がいがある子どもを持つ親の方たちは、中々働きに行けないということもあるの

で、そういうところの支援も、何かできることがあればお願いしたいと感じている。

【教育委員】

政策分野別の資料の中で、「ひと」の分野で「福島ならではの」教育の充実というものが挙げられている。そこに六つの施策が掲げられているが、その中に『『学びの変革』の推進と資質・能力の育成』という項目がある。

先ほど委員から話のあった光南高校と湖南高校のICT授業について、先般、私も視察させていただいた。それぞれの学校の学力は異なるが、生徒さんや学力に合ったICT授業の現場を見させていただき、ICT授業を通じ、非常に生徒さんが生き生きとしており、そのすばらしさについて、私自身が大変感銘を受けたというか、非常に効果があるということを感じた次第である。そこで、その項目にある「ICTの活用等による学びの変革に関する取組」については、是非、積極的に取り組んでいただきたい。

それから、「学校組織の活性化の推進」という施策がある。残念ながら、昨今、福島県教員の不祥事、これはもう本当にがっかりという言葉であるが、ここで触れているように、教員の養成、採用、研修に関する取組、特に研修に対する取組について、強く推進していただきたいと思っている。

それから、「人生100年時代を見通した多様な学びの場づくり」という施策がある。その中で、「社会教育施設等の利活用の促進に関する取組」として色々と記載されているが、こういった非常に有効な施設を利用して、いわゆる人生100年時代を見通した学びに寄与したり、あるいは、生涯学習の機会提供に関する取組を進めたりすることによって、将来においても豊かな生活を送っていこうということであり、私が今言った項目については、積極的に取組を進めていただければと思っている。

【教育委員】

今回、この大綱を読ませていただいた中で、非常に印象に残ったのは、多様性という言葉がたくさん出てきたことである。個性を大切に伸ばす教育、これは多様性を重視していくという話や、多様な学びの推進というところで、知識、技能にプラスアルファして思考力だったり、表現力だったり、人間性だったり、さらに、学びの変革でICT活用ということが言われてきている中で、学校の先生方も多様化、複雑化する教育現場、教育のニーズへどう対応するかということで、この多様性については、私たちも、多様なニーズにどう対応するかを考えることがこれからの課題となっており、教育の現場においては、キーワードは多様性の多用なのかなと思った。

先日、皆さんと一緒に初めて学校訪問に行ってきた。その中で、地域差はあっても、それぞれの生徒の個性に合わせて、その学校の現場がどういう方針を作っていくのが非常に大事であり、その決定内容というのは、子どもたちのそれぞれ多様性に対応して、多様性を力に変えていくものになる。すなわち、その学校の特色や地域と直結した、そうした魅力づくりが非常に大事であると感じた。

それぞれの学校に、それぞれ特徴があって、そこで生徒さんたちが、それぞれの学校の方針に則った形で事業を展開している中で、非常に生き生きと積極的に関わ

っていた姿勢というのが、すごく印象に残った。そういう意味では、地域と直結した学校の魅力となり得るようなものを、それぞれが取り組んでいくということが大事であり、そうした運営がうまくいくよう支援していくことが、私たちの役割であるのかなということを改めて感じた。

【教育委員】

「福島に誇りを持つことができる教育の推進」という施策について、やはり郷土を誇れる教育というか、昔大学に行っていた時に、全国から学生が集まる中、福島県はどこにあるのかと質問する人がいた。そういう状況では、県の活力というか、将来的な県の発展などについて、少し疑問に思ってしまう。それは、やはり郷土の理解が不十分で、郷土を自慢できるような教育をしたけれども、多分、子どもの頃にそれを受けているはずだが、それが大人になったときに響いていない教育である可能性がある。郷土理解を深める教育、郷土をとにかく理解して、郷土を発信していくようなことをポイントに置いて、教育委員会でも取り組んでいければと改めて思った。千円札の肖像が誰かということを、本当に分かっていない方が普通にいる。医聖、野口英世であり、そのような偉人を輩出していることなど色々とあるので、そういったことを発信できればいいと思っている。

また、「家庭の経済的支援の充実に関する取組」というものがあり、これは奨学資金を貸与するということなのだが、それ以外にも、やはり何らかの方策というか、全世界的な潮流だが、コロナで格差の拡大ということが言われていて、日本もアメリカと同じようになっていくという歴史があるとすれば、そういう社会になっていく可能性がある中で、経済的な支援を必要としている方にタイムリーに支援をしていくことは、非常に重要だと思っている。

県庁職員や学校の先生たちは、それなりに一定水準の環境で育った方が多いのではないかと想像している。東大生の親の年収が平均より高いということはデータで出ている。そういった方々が、経済的に恵まれていない子どもたちに気持ちを寄せていただくということは、根本的に少し難しいというか、見えにくいのかもかもしれない。しかし、そこは是非、気持ちを寄せていただき、奨学資金の貸与を始め、様々な制度を検討していただきたいと思う。

どうしても経済的に恵まれない家庭で生まれてしまう方は、必然的にいる訳で、例えば、大変な田舎に生まれると、色々な意味で都会に生まれた方よりもハンデになったりする場合があるなど、そういった方への目配りというか、温もりのある施策を検討していただきたい。そうした方が、将来、そのような施策で今の自分があるということで、県に寄与するような人材に育っていく可能性がある。

それと、トータル的な話だが、「結婚・出産・子育ての希望をかなえる」という内容がある。これは移住や定住ということで、ポストコロナを見据え、福島県は新幹線で東京、首都圏から1時間半でアクセスできて、新幹線が中通りに通っており、1時間も車を走らせれば、風光明媚な歴史のある会津地方に到達し、逆に向かえば、今度はすばらしい海産物が獲れる太平洋にアクセスできるということで、テレワークなどを見据えたときに、本当に移住しやすい場所である、多分に身びいきに発言していることは承知しているが。

私は昔、郡山市の空き家対策審議会のメンバーになっており、郡山は、意外と駅

近くの地価が高いエリアでも普通に空き家があり、市では、不動産屋等と連携して空き家バンクに取り組んでいるのだが、空き家をテレワークのようなイメージでマッチングできたらすごいなと思っている。

【教育委員】

資料の中に、幼小中高が連携するという内容がある。私は、以前から算数や理科など、福島県の（学力が）少し低いところというのは、幼稚園教育、家庭教育が一番（の原因）ではないかと思っているので、幼小中高の連携には、非常に力を入れていただきたい。

ICT教育については大変興味があり、先日も見せていただいたのだが、世の中がICT教育に移りつつある過渡期なのではないかと思う。それを考えたときに、昔、ゆとり教育と言われていたのだが、ゆとり教育は、先生によっては課題を見つけて、このようなことを皆で研究しようという時間であった。そのため、ICT教育も、現場で先生方がどれだけ真剣に取り組むかであり、生徒一人ずつに使い方を教えるだけの授業で終わってしまうことがないように、せつかくの一人一台の端末であるので、有効に活用していただきたいと思う。

また、教員の養成・採用・研修ということで、大学の教育課程において、ICT教育について教えるような授業が一コマくらいあれば、非常にありがたいと思う。

また、大学4年生の教育実習ではなくて、大学生が地元に戻ってきて、ボランティアで小学生などに端末の使い方を教えたりするなど、それを個人で行うのではなく、市町村を通して実施し、ハンコなどを押してもらい、それでポイントがたまれば、教員採用試験を受けるときに何か少しプラスになるようなことがあれば、やる気になり夏休みや冬休みに来て、子どもたちと接することができるのではないのかなと思う。そのような加点してあげられるシステムがあれば、今の大学生や高校生でもうれしいのではないかと思う。

先ほど話があった奨学金についてだが、実際に奨学金を受けて大学に行っている子どもは、かなりいるようである。しかし、奨学金を返すのが大変で、返せない状況に陥り、大学を卒業して職がないのに、返すお金がなくて、そのためにアルバイトをしている人がかなりいる。福島県は、特に大変な経験をしているので、奨学金については、貸与ではなく与えて、返さなくてもいいという奨学金をたくさん作っていただければ、助かると思う。

また、生涯学習の機会について、人生100年ということがあるが、私は今年の5月くらいから、ずっと「人生100年だから、私たちはまだまだこれから頑張れる」と言っている。というのは、5月に白河市でフジコ・ヘミングが演奏会をしたのだが、彼女は89歳であり、室井摩耶子さんというピアニストも100歳である。また、ユーチューブで見たのだが、91歳の女性がフルタイムで働いており、「エクセルは便利である。統計から計算から全部してくれる」と話していてギネスに載ったということです。それを聞いたときに、私は全然この91歳の方よりエクセルができない、負けているなと思ったのだが、やはり人生100年の時代になってきており、社会、教育、生涯学習が、非常に大事になってきているのではないかと思う。

その生涯学習の中で、私自身も公民館で活動しているが、去年、一人が練習中に

少し具合悪くなり救急車で運ばれ、良くなってきたと思ったら、そのままお亡くなりになってしまったということがあり、非常にショックを受けた。その方は、身内に電話が通じたから良かったが、一人暮らしの場合、連絡先が分からないと困る。そのため、緊急時の連絡先、かかりつけ医、いつも飲んでいる薬などを書いて保存してもらうことにした。一人で生活している高齢者が多中、生涯学習の中の一環として、そのようなことも行っているような状況にある。

それから、少子化の影響で、クラブ活動などを学校ごとに行うことが大変になってきている。ほかの学校と一緒に、部活のようなものを学校関係ではない方に指導していただくようになるという話がある。そうした場合、合唱王国ふくしまと言われているのは、全て学校単位となっているが、そういうことも変わってくる。指導する先生も、学校の先生ではない方が関わり、部活ではないということになると、野球やラグビーが強い学校など、甲子園や花園を目指そうとか、合唱コンクールで全国大会に行こうなどという、今までの形が随分変わってしまうのかなと、それは世の中の動きなので仕方がないのだが、非常に寂しい思いをしている。

【教育長】

教育委員の方には、先日、学校の視察に御一緒していただいた。非常に温かい評価を頂き、感謝する。なかなかコロナ下で実現できないでいるが、色々と対策をとりながら、今後もお声掛けをしていきたい。

大綱は教育という一部分ではあるが、教育を通じ、県のほかの色々な施策と関連して、最終的には、県民の幸せを実現するための一翼を担うことができればいいと思っている。

人生100年時代という話はもちろんあるが、御高齢の方から小さい子どもまで、私は、居場所と役割が大事と思っている。もちろんお金は大事で、生活していけないと困るが、生活していけるお金があった上で、居場所と役割を何らかの形で持てれば、幸せはそう遠くないと思っている。そのために、教育の関係で言えば、施策の中にも出てくるが、いわゆる学校だけではなく、ほかの生涯学習、文化スポーツも含めて、健康や雇用等も関係する話だが、そういうところの充実を図り、県民の幸せにつなげていきたいというのが一つ。

それから今日、直接話は出てこなかったが、SDGs、これは今回、県の計画でも、それから教育委員会の部門別計画でも重要な位置付けにしている。先ほど義務教育課から説明があった羽太小学校の事例の中にも出てきたが、震災の関連学習をしていく中でも、カリキュラムの組み方によっては、健康、環境、人権などのテーマで学習ができて、これは全部SDGsにつながっていく。そういう点で、テーマの連携というか、テーマをうまく連動させて授業に取り組むと、効果が二重、三重に上がっていくのではないかと。教育委員会の仕事というのは、SDGsと非常に親和性が高いと思うので、そこをしっかりとやっていきたい。また、連携で言えば、これは反省も含めてなのだが、日頃から気をつけていても、まだまだ足りていない。先ほど、知事からナラティブ・スコラの話もあった。また、委員から、良いパンフレットと御紹介いただいたのは、ホープツーリズムのパンフレットだと思う。それも、実は事業が始まった後で、私は色々と知り、これはすばらしい、ナラティブ・スコラをもっと教えてほしいと、このパンフレットもすばらしいものであり、本当

に教育委員会でもほしいくらいである。そういうものが、実はあちこちにあって、みんな一生懸命に取り組んでいるのだが、全然つながっていないというケースが時々ある。特にホープツーリズムなどは、今回の語り部活動とも連携が必要だと思うし、語り部活動、語り部の育成をするには、ホープツーリズムの取組は正にそれに近い形だと思うので、その辺りの連携に、また一段と気をつけて取り組んでいきたいと思う。

【知事】

次期教育大綱は、福島県にとって大事な羅針盤となるものである。
皆さんの御意見も踏まえながら、引き続き、しっかりと策定してまいります。

<第7次福島県総合教育計画（中間整理）について>

【知事】

報告事項について、育総務課長から説明をお願いします。

- － 教育総務課長から資料3-1、3-2について説明 －

<県立高等学校改革前期実施計画の進捗状況について>

【知事】

続いて、県立高校改革室長から説明をお願いします。

- － 県立高校改革室長から資料4について説明 －

【知事】

以上で本日の議題は全て終了した。
円滑な議事進行に御協力を頂き、感謝する。

(3) 閉会

事務局（政策調査課長）